

秦一明と二〇年

〜二代目戸長の人物像を求めて〜

東川 孝

二代目戸長秦一明を讃える会 会長

一・二〇年目の集い

平成二十年八月八日は、二代目戸長秦一明の二二四年目の命日である。関係者一〇名は千歳市末広第一霊園で墓参し、会場を移して直会なほあひを開催、秦戸長を偲びながら今までの研究テーマを語り合った。最後に小生から墓碑が改修され命日の墓参が始められて今年が二〇年目の大きな節目を迎えることができた。これは会員皆様の長年にわたる献身的な努力の賜物で深く感謝を申し上げる。会員の高齢化もあって今回をもって、会としての墓参は終了する。今後は各自でそれぞれが墓参をしてほしいとお願ひした。

振り返れば、なぜ我々が二代目戸長の墓碑改修と命日の墓参をするようになったのか。それは、秦一明の関係者が千歳に居住していないこと、現職で急死したことから、当時の有志によって墓碑建立、その管理をしていた新保義美（故人）から、秦戸長は初代戸長石山専蔵が後任とした人なので、石山家の子孫であるキミに管理を願いたいとの要請があった。昭和六十三（一九八八）年の春のことであった。

二・二代目戸長秦一明を讃える会の設立

平成元（一九八九）年二月二十日、二代目戸長秦一明（以後「秦戸長」という）の墓は傷みが進み放置できない状況にあることを確認し、墓碑改修等を行うため、市民に浄財を願うこととして設立した。

これが多くの市民の理解と協力によって、短期間に協賛者二一〇名

（法人二一社を含む）、協賛金二二七

万七〇〇〇円が募り、墓碑改修、記

念誌、協賛者名碑などを作成し、命

日に開眼供養を行った。

なお、現在の墓は昭和三十八（一

九六三）年、北栄墓地から千歳市に

よって移設が行われている。宗派は

曹洞宗である。

三・秦戸長の人物像

（一）秦一明 略歴

ゴシックは札幌県履歴書（官員進退調綴込）に記載されていたもの。

原簿 青森県東津軽郡青森大町平民

文政十一（一八二八）年二月

伊予国新居浜郡榑木村に生まれる

（名は斗鬼三）

・・・（年月日不詳）

西蒲原郡源八新田山岸藤四郎

二女まきと結婚

・・・長男殿三生まれる

・・・養女くら入籍

安政 元（一八五四年）二月二十日

二女かね生まれる（青森大町）

・・・渡島国亀田郡鍛冶村五十一番地

・・・幕府御抱席

・・・二女かね松前藩・藩公婦人腰元



写真-1 秦一明の墓碑（末広第一霊園）

慶心 三(一八六七)年十月 歩兵一中隊嚮導役取締・同心格⁽¹⁾
慶心 四(一八六八)年 (二月 戊辰戦争開戦)
(九月 改元)

明治元(一八六八)年七月十五日 箱館府趨事席、親兵隊長⁽³⁾
八月二十六日 給仕席⁽³⁾

十月 (二十日 旧幕榎本軍・鷲の木海岸上陸)
二十四日 清水谷府知事に随行して青森へ渡海 長男

殿三(鼓長)、塩谷采作(分隊取締役)同行
親兵隊を新兵隊と改称
十二月 黒石宿陣中、従事席

明治 二(一八六九)年 四月 榎本軍討伐のため上磯郡泉沢に渡り矢不
来・七重・亀田などに転戦

八月 榎本軍降伏後、この戦いで兵員減のため新
兵隊・在住隊合併して函衛隊と称し、隊長
になる

(八月 胆振国千歳郡編成)
(八月二十日 高知藩支配)

九月 砲兵隊長兼務
十月三日 開拓使少主典⁽⁴⁾
明治 三年(一八七〇)年一月 御用掛開拓少主典

「斗鬼三」を「一明」と改名
(・・・高知藩・ママチ川両岸拓殖)
函館火災消火指揮で手当三百匹受領

明治 四(一八七一)年三月 函衛隊長被免、同隊用掛
四月十七日 函衛隊を護衛隊と改称

明治 五(一八七二)年 五月 (四月 開拓使千歳出張所開庁)
砲兵隊解隊、祝砲扱いの砲卒

明治 六(一八七三)年五月 (十月 千歳郵便局開局)
元函館府砲兵は陸軍省に移管六月権中主
典、福山紛擾に砲兵隊責任者として出勤

七月四日 (口達) 江差福山人民暴動二付、歩兵一小
隊大砲隊二組卒七弘明丸二塔シ江差へ向
ケ出張

明治 七(一八七四)年二月五日 (十二月 室蘭街道開通・千歳駅通所開設)
依願免本官

明治 八(一八七五)年八月十四日 大監吏申付(函館税関)⁽⁵⁾
明治 九(一八七六)年七月十六日 函館税関吏として明治天皇奉迎
明治 十一(一八七八)年 (十月 官営美々鹿肉缶詰所開設)
明治 十二(一八七九)年 (一月 明治天皇行在所豊平館着工)

五月一日 小樽税関在勤
(七月 郡区町村編成・五郡役場開庁・本
郡苦小牧)

明治 十三(一八八〇)年 (・・・寺子屋開設)
(三月 戸長役場開庁)⁽⁶⁾
(四月 小学校授業開始・戸長宅)

四月二十六日 依願免本官
千歳郡漁村九番地塩谷采作宅寄留
・・・千歳村十一番地(石山寺蔵所有地)に仮
住まい

十月 千歳村十九番地戸長役場に移転
十月二十五日 千歳郡各村戸長任命
二十八日 千歳郡各村戸長拜命

明治十四（一八八一）年四月

千歳教育所設立・戸長授業を兼務

九月二日

（八月 豊平館完成）

午前七時明治天皇豊平館御発轡

午後四時二十五分千歳村行在所御着轡

明治天皇をお迎えする

非常御立退所・石山専蔵宅

三日

午前七時千歳村行在所御発轡

苦小牧学校千歳分校学務委員

明治十五（一八八二）年

札幌病院に入院

八日

戸長現職のまま病気で死亡

……妻まき追われるかのように千歳を去り、

二女かねの嫁ぎ先・漁村塩谷栄作宅に同

居

（……山口県人三三言千歳移住）

この経歴を見るに、文政十一（一八二八）年の出生から慶応三（一八六七）年の歩兵一中隊嚮導役取締・同心格就任までの期間がほぼ空白となっている。この三九年間は何をして、どのような活躍をしていたのだろうか。この空白期間を調べるのも課された務めであろう。

（二）その人物像

秦戸長の人物像を知るため、初めから探していたのは本人の写真と人物の画であった。道立文書館、函館市史編さん室、函館税関等で調べたが、これらはいまだに不明である。そうすると人物像は残念ながら推測するか方法がない。ここで現存の資料を見ると、

明治元（一八六八）年履歴短冊

「伊予国新居郡西條榎木村・草莽」

明治二（一八六九）年官員進退調綴込

「松平右京大夫領榎木村・元庄屋」

明治十八（一八八五）年札幌県履歴書

「渡島国亀田郡鍛冶村五十一番地・平民」

「胆振国千歳郡千歳村二十二番地・平民元愛媛県」

とある。

この「草莽」とは、幕末の正規の武士身分ではない志士。本来は草むら意味し、草莽の臣あるいは草莽の志士と称した。

秦氏は東は美濃から西は伊予・筑前に及ぶ広い範囲に居住し、土木かんがい技術など先進技術をもたらした。一説には中国・秦から亡命した人、朝鮮半島出身の新羅の渡来人とする説があるが、近年は後者が有力とある。

草莽の志士は、前述のとおり武士以外の身分のものだが、榎木村の秦氏は、西條の東飯岡を支配した豪族であるが天正の陣後、その一族の一部が榎木に帰農したといわれる。「西条誌」（天保十三（一八四二）年儒学者日野暖太郎和煦編）によれば「この者の家、御拝地前より庄屋にて、当村の開基なりといふ。（中略）代々庄屋役を勤む」との記録がある。その末裔の一人が秦斗鬼三であった。

幕末の西條藩は尊王の気風が強かったが、西條藩は、御三家紀州徳川家の分家に当たり、藩政上も宗家和歌山藩の影響が大きかった。藩論も大勢として、宗藩にならって佐幕の方針であった。

秦家の子として生まれた斗鬼三は、近藤篤山・南海らの思想に影響を受け、草莽の志士として出奔したのだろうか。

（三）新潟・青森での行動

平成九（一九九七）年八月の大谷レポート「秦一明とその末裔」による

と、秦戸長は、新潟県平民山岸藤四郎二女まきと結婚、子には殿三、かね、養女くらがいる。かねは安政元（一八五四）年二月二十日出生、年月日不詳で青森県東津軽郡青森大町「秦一明二女人籍又」となっている。

当時の青森は、人口七、八千人の津軽藩の港町・青森大町は現在青森県立郷土館のある辺りで、当時は商工業者のマチであった。

かねは、渡島国の住人塩谷栄作と結婚する。塩谷栄作は弘化二（一八四五）年生まれ、函衛隊員で、のちに千歳郡漁村（現恵庭市大町）に移り、明治二六（一八九三）年、支笏湖の現在の丸駒温泉の以前に、温泉旅館を経営した。また恵庭村総代人でもあった。

かね四代の末にあたる塩谷克彦は、かねの孫にあたる祖母小林ユキから、栄作は松前藩樺術指南役、かねは藩公夫人の身の廻りの世話をする腰元であったが、恋仲になり駆け落ち同然で恵庭に來たと言い聞かされていたと話す。除籍簿によると塩谷栄作の父は塩谷松右衛門。栄作は足軽身分か、一代御抱えの樺術指南だったのかもしれない。

結婚の時期は不明だが、明治維新当時、栄作四一歳、かね一四歳である。

図1の家系図を見ると、身内関係の経過はわかるが、秦戸長自らの動きは見えてこない。新潟・青森では何をしていただろうか。親戚関係での仕事か、または草莽の志士としての何らかの活動をしていたのか、今は資料不足のため判断はできない。

しかし、幕末から明治にかけて箱館府給事席、開拓使権中主典、函館税関吏を務め、千歳郡各村戸長として明治天皇行幸をお迎えしたことから、経歴の空白期間があっても、それでこのことが左右されることはない。

想うに、草莽の志士として国を出て最後の仕事として明治天皇を迎え、幕末から明治の激動の時代を強く生き抜いたのは大きなロマンであり、男の本懐ではなかるうか。

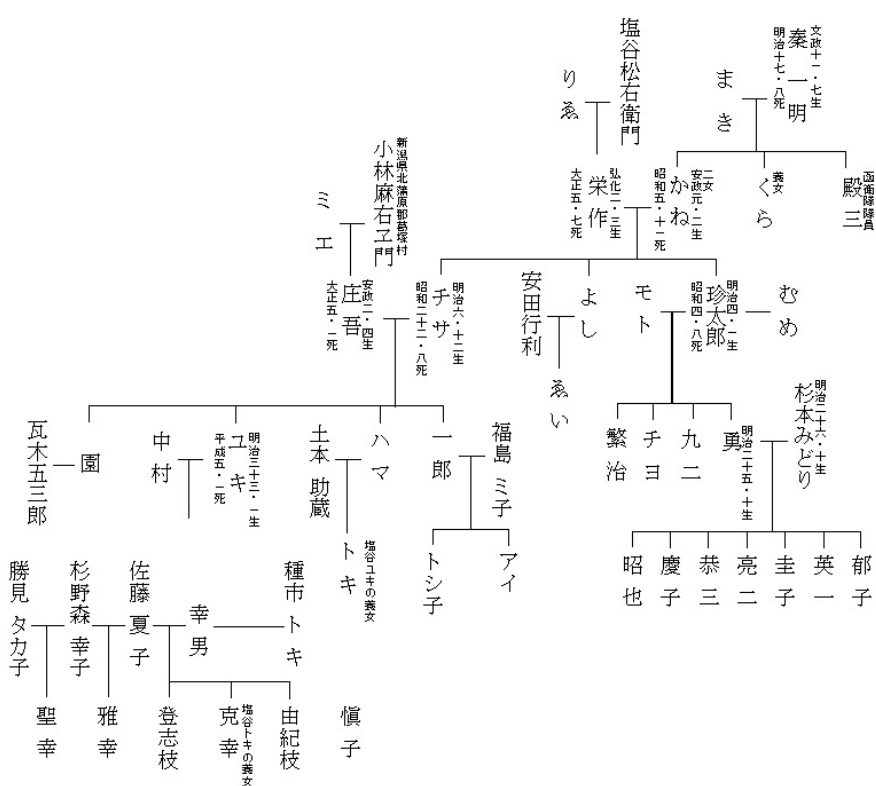


図-1 秦・塩谷家の家系図

四・石山専蔵

小樽税関を退官した秦一明は、娘婿・塩谷栄作のもとに寄留する。一明を開設間もない寺子屋教育所に招いたのが千歳郡各村戸長石山専蔵である。専蔵は草創期の千歳で郵便取扱人、総代、初代戸長などを歴任した人物として知られる。

専蔵は就任七カ月余りで戸長を辞任する。その後任に任命されたのが秦

一明であった。

石山専蔵は室蘭市岩見沢に鉄道が開設される頃、稚内に移住する。この時すでに分家していた七三郎は千歳に残る。七三郎は水田開発のため蘭越から根志越までの用水溝開鑿にあたり指導的な役割を果たしたことで知られる。

五・今後の課題

秦戸長の墓碑所在地は次のとおり。

所在地 千歳市稲穂二丁目 千歳市末広第一霊園 三A区三列又号

使用面積 四平方メートル

許可年月日 昭和三十一年

再発行 平成元年七月四日

二代目戸長秦一明を讃える会は、平成元年から墓碑の管理と命日の墓参を続けて二〇年になったが、今は当時の関係者も死亡、転勤、高齢化等によつて、本来の目的を十分に果たせなくなった。今後の管理をどうするかを検討しなければならない。

秦戸長は、千歳草創期の戸長として、小学校の開設、明治天皇行幸の奉迎など、本市の基盤を築いた功労者でもあることをよく理解してほしい。

『増補千歳市史』の執筆者で北海道文化賞を受賞した作家、長見義三は生前、秦一明の墓は千歳市の史跡または文化財として市が指定すべきではないかと発言している。

奇しくも今年、戸長役場開庁一三〇年の年でもあることから、市を中心とした関係者でよく検討することを願うものである。

聡明な皆様のごい知恵を期待して筆を置く。

(文中敬称略)

註

(1) 部隊が横隊に編成されている場合、その両翼に配置して整頓・行進などの基準とする者、各一名をいう。(軍隊用語) 先立って導くこと。案内。

(2) 江戸幕府の配下に属し、与力の下にあって庶務、警察の事をつかさどった下

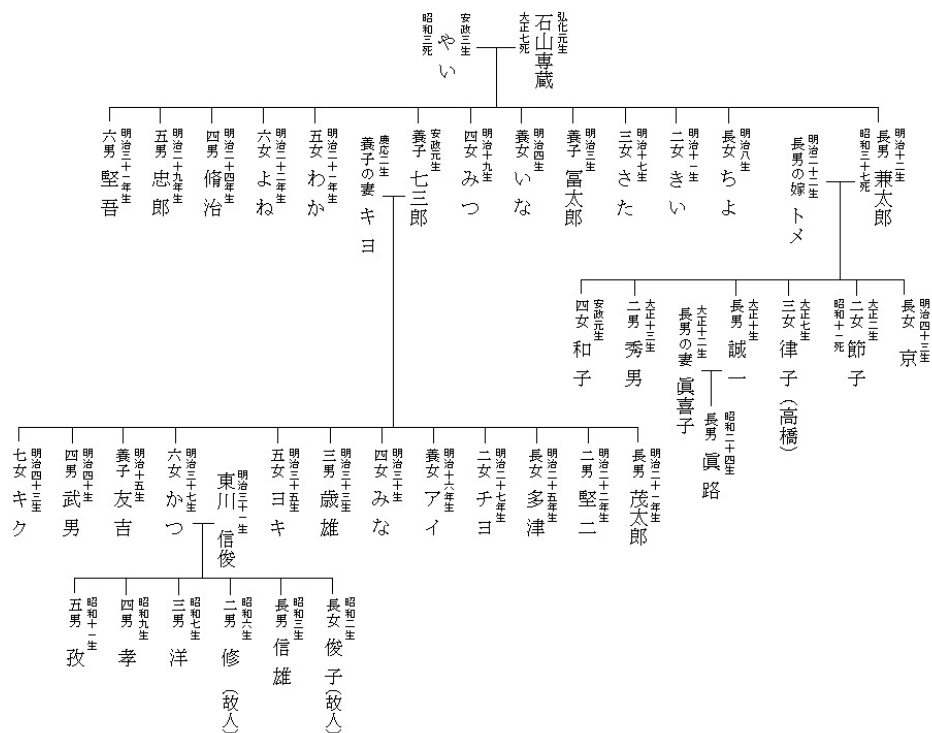


図-2 石山家の家系図

級役人

(3) 箱館裁判所(のちの箱館府)の内部組織の職名。司事・参事・従事・給事・趨事席・無等の順位となる。

(4) 明治二年当時、開拓使職員総数三三五名、少主典は二位・五三名・年俸五〇石(五〇円)、権中主典は一〇位

(5) 税関の内部組織。監史総長、監史副総長、監史長、監史副長、大監吏、中監吏、小監吏の七階級があった。大監吏は月給三三円、現在の職制で係長相当

(6) 現在の市役所のこと。明治十一年の郡区町村制編制法に基づき、北海道では翌年から施行され、札幌と函館にのみ区制(現市制)をとり、その他は旧来の郡の下に八二六町村を定めた。しかし当時は寡少な財政事情のため、郡・町村ごとに役場が設置されたわけではなく、数町村をもつて一つの役場を設置した。千歳郡各村戸長役場も同様で、明治十三年千歳村、長都村、漁村、島松村、蘭越村、烏柵舞村の六カ村をもつて戸長役場が開設された。その後、戸長役場の多くは北海道一・二級町村制の施行によって、それぞれ二級及び一級町村へ移行していったが、戸長役場が全て消滅したのは大正十二年であった。ちなみに、千歳最後の戸長は、一六代間山俊助であった(大正三年五月三十日〜大正四年三月三十一日)

(7) 幕藩体制社会の構造的変化の中で、浪人、郷土、豪農、豪商など武士以外の身分の者が、政治運動に重要な役割を果たすようになったからである。こつした層の参加が、明治維新を幕藩制の再編成にとどめない深刻さをもたらした(『新編日本史事典』東京創元社より)。また、『千歳市民文芸 第七号』(昭和五十四年十一月発行)の「千歳開基の頃」で長見義三は、草莽とは「明治維新草莽運動史」(高木俊輔著)に「よる」とし、

- 一 尊攘討幕の主唱者たる豪家の農商
- 二 豪農・地主・庄屋などの村役人層であり、しかも手作経営主であるもの
- 三 地方的な市場圏の担い手である在郷商人層

の諸説があるが、経済的にみれば在郷商人とか、豪家の農商を示す「豪農」層を表わし、政治的には尊主攘夷派に位置づけている。例えば、高山彦九郎を「草莽の臣」と呼ぶ観念がある。その心をもつて秦戸長は自分の肩書としたのであろうかと解説している。

(8) 大谷敏三 平成十七(二〇〇五)年「秦一明の故郷を訪ねて」

秦一明を讃える会研究発表

別表 秦一明を讃える会・研究発表テーマ一覧

発表年	テーマ	研究発表者
H 7	明治天皇御巡幸奉迎概況調	守屋憲治
" 8	秦戸長在任中の千歳の統計	"
" 9	秦一明とその末裔	大谷敏三
" 10	秦一明の居所について	守屋憲治
" 11	新兵隊と秦一明	大谷敏三
" 12	明治 14 年北海道御巡幸	守屋憲治
" 13	箱館戦争の斗鬼三と殿三親子	大谷敏三
" 14	秦一明の死	守屋憲治
" 15	初代戸長石山専蔵と石山家の人々	大谷敏三
" 16	秦一明と三木勉に見る千歳の教育	守屋憲治
" 17	秦一明の故郷を訪ねて	大谷敏三
" 18	第 1 次山口県移民に係る現地調査	小田賢一
" 19	函衛隊と秦一明	大谷敏三
" 20	秦一明の略歴	守屋憲治

戸長就任前に秦が勤めていた函館税関の広報誌に会の活動が紹介された(平成 10 年)。

